

『ユネスコスクール実践事例集』改訂にあたって

北海道ユネスコ連絡協議会

会長 大津 和子

『ユネスコスクール実践事例集』が刊行されて2年が経過しましたが、その間、「持続可能な開発目標 (SDGs)」がメディアなどによって報道されるようになり、SDGsを取り入れる企業も少しずつ増えてきました。SDGsが教科書に登場したこともあり、学校教育においても少しずつ注目されるようになってきました。とりわけ、ユネスコスクールはESDの推進拠点であるため、SDGsに対する関心が高いと思われます。

そうすると、「持続可能な開発のための教育 (ESD) と SDGs はいったいどのような関係にあるのか、といった疑問が生じてきます。ESDの推進は、SDG4.7に目標として掲げられていますが、教育については、「教育がすべてのSDGsの基礎」であり、「すべてのSDGsが教育に期待している」ともいわれています(文部科学省ユネスコ国内委員会『ESD推進の手引き改訂版』)。つまり、ESDは全てのSDGsの実現の「鍵」であるともいえるのです。ESDをより一層推進することが、SDGsの達成に直接・間接につながっているといえます。今後は、SDGsと関連させたESDの実践が増えていくと考えられます。

さて、今年度、道内のユネスコスクールは、幼稚園4園、小学校15校、中学校8校、高校18校、市小中併置校2校、義務教育学校1校、中等教育学校1校、特別支援学校1校、計50校になりました。各学校におけるESD活動は地域や学校の特性を生かして多様です。ここでは、3つの実践事例に注目します。

生振小学校は、ESDを通して子どもを育てるための全体計画で、次の4点を重視しています。①学びと学びをつなぐ：ESDカレンダーの見直しにより各教科等のつながりを強化する。②子どもと子どもをつなぐ：学校田活動、世界寺子屋運動(書きそんじハガキ回収・ユネスコファーム活動)などで、異学年交流による体験的な学習を計画的に位置付ける。③子どもと地域をつなぐ：地域の教育資源を有効に活用できるように人材の発掘及びリスト化を図る。④子どもと未来をつなぐ：よりよい未来を実現するために自分ができることを考えたり、考えたことを具体的に行動する機会を設ける。

附属釧路中学校では、平成24年より2年生が宿泊研修で長崎を訪れています。戦争と平和の歴史、核兵器の投下や戦争の実態、平和をつくりだしていくための努力、戦争をなくしていくための知恵や思想等を学んでいます。宿泊研修での学びを1年生に座談会形式で伝えることにより、平和への願いは下級生に引き継がれています。そして、学年生徒一人ひとりの思いや願いをつなぎ合わせて「附中平和宣言」を毎年採択しています。

旭川龍谷高校のESD活動は、3本の柱からなっています。郷土理解では、郷土部が「上川アイヌの世界観～カムイと共に生きる上川アイヌ～」を発表して、高文連全道大会で最優秀賞を受賞しました。国際理解では、台湾およびハワイの学校を訪問し、授業体験や日本文化紹介などの交流活動を行いました。社会貢献では、インターアクトクラブが高文連のボランティア研究大会に参加し、他校生徒と情報交換や交流を行いました。

以上、3校の実践のみを取り上げましたが、本実践事例集をお読みいただき、今後も互いの実践から学びながら、ESDをよりいっそう充実させていかれることを期待しています。